井中餘聞

——鏡と夢と神靈と——

堀　誠

一

平成甲戌・乙亥の二年つづきで、日本の夏は常ならぬ渇水に見舞われた。恵みの雨は天のみの知るわざとあって、土地によっては古式ゆかしく雨請いを行い、水神さまや龍神さまに降雨を祈願するようなこともあったと聞く。井戸枯れがあったかは知らないが、事實として日頃の水の有難みと節水の重要さを認識する結果となった。

當時、井戸は生活用水の重要な給水源であった。古く中國では「五祀」といって、門、戸、井、竈、中霤（土神）という五つの神祇を祭祀したことが『白虎通』「五祀」の記載に見えている。水は飲料や食の煮炊きといった生命の維持に不可欠なもので、井戸はその主要な供給源として水そのものをも意味した。農暦の除夕に井戸に封をし、春節後の初めて水を汲むときに紙錢を焼いて井戸を祭る。節日には井戸邊で井神を祭り、甘いものを供えたともいう。水が清く甘く、無毒で水源が充足されんことを祈っての原始的な習俗といえる。あるいはまた梁・宗懍の『荆楚歳時記』には、「正月の末日の夜、蘆苣の火もて井廁の中を照らせば、百鬼みな走（に）ぐ」と見えている。葦はことに辟邪の力をもつし、かつ火を照らすという行爲が驅邪の方途と考えられていたことも知られる。

このように井戸が生活に密着し身近に存在するものであれば、それにまつわる話題も極まることがない。井戸は多様に悲喜劇を演出している空間でもあるようだ。そうした特異で

神秘的な空間をめぐって、もう少し散策を試みたい。(1)

二

明の第五代宣德帝の御代、宮中では促織（こおろぎ）を闘わせる遊び（こおろぎ合わせ）が好まれ、毎年民間からこれを獻納させた。

これは、清・蒲松齢の『聊齋志異』の名高い「促織」の書き出しである。あるとき、華陰の縣令が上官に媚びようとして一匹獻上したところ、これがよく闘うので、つねに獻納をいいつけてくる。縣令は里正（むらおさ）に催促し、村人との中間に立つ里正はその上納の義務遂行のために苦心慘憺を餘儀なくされた。まさにその苦しみを背負わされた朴訥な正直者、成名なる里正にまつわる話が「促織」の一篇である。

心ならずも里正となって、一年もたたぬうちにわずかの家產もなくしてしまった成名のもとに、はたまた促織獻納の命令がふりかかる。蟲を調達する金を家々に負擔させるわけにもいかず、自腹を切る餘裕とてない。死を覺悟したけれど、妻のすすめで氣を取り直し自らコオロギを搜すが、期日に間に合わずにむち打ちに處される。苛斂誅求に世をはかなむ折から、妻が背のまがった巫女に占ってもらうと、一匹のガマに狙われた青痲頭と呼ばれるコオロギの描かれたお告げの繪。成はその繪に描かれた場所が村の東の大佛殿にそっくりだとふんで搜せば、一匹のガマが躍りでた。それを追ううちに捕まえ得たのが强そうなコオロギ。喜んで籠に入れて歸り、獻納に備えたが、成の九歳になる子が父の留守に興味津々でこっそり盆（いれもの）を開ければ、コオロギは飛びでて、あまりの素早さに捉えられない。手でようやく撲って捕まえれば、脚はとれ腹は破れている。恐くなって母に告げれば、青筋たての劍幕にあい、子どもは泪ながらに出ていった。まもなく歸った成は話を聞くや氷雪をかぶったごとく、怒りもろともに子どもを搜しに出たが、杳として行方がしれない。やがて井戸から子どもの死體が發見される。思い詰めた子どもは、けなげにも自ら井戸に身を投じたのであった。

井戸は恰好のあの世への身近な通路であり、(2)まさにその子は自ら死に場所を井戸に求めたのにほかならない。變わり果てた肉體を前にして、親の怒りは悲しみに一變する。日暮れに及んで藁でつつんで葬ろうとすれば、氣息がかすかにあるではないか。介抱の甲斐あって夜中に蘇り、夫婦は一息つくが、しかし子どもは昏々と眠りつづける。この昏睡の間に何がおこったか。この再生をもって話は大きな展開をみせる。

夜明け方、まんじりともせず成名が思い嘆くおりから、ふと門外に蟲の鳴き聲を聞きつける。ハッと起き出して、ようやく捕らえ得たのが、體は小ぶりだけれども土狗に似た梅花翅とよばれる一種。試しに闘わせてみれば、無敵で、鶏の襲撃もかわす身輕さ。かくて獻上されたコオロギに皇帝はご滿悦であったが、このコオロギがいかなる正體のものであったか。テキスト（たとえば三會本）によっては、

後歳餘、成の子の精神舊に復し、自ら言ふ、「身 促織に化し、輕捷にして善く闘ひ、今始めて甦るのみ」と。

とある。強力なコオロギはこの息子の魂魄が化成したものであったことが明言される。唐代傳奇の『離魂記』のごとく、肉體を離れ去った魂魄は化現する。いわゆる變身ではないけれども、そのコオロギへの化現は、夢幻的な變身といってもいいかもしれない。井戸への投身と魂魄の化身、それは不可思議な非日常の出來事である。たとえ回復した子の告白の言辭がなかろうとも、そのコオロギへの化身は豫想しえるであろう。このように「促織」は、およそ趣向の面からも特異で夢幻的な一篇であり、舊時の世相、人民の懊惱の交錯する社會派的な面も備わる作と評價することができる。

三

景陽宮井剩堪悲
不盡龍鸞誓死期

唐・李商隱の「景陽井」詩に、この起・承の二句がある。陳の滅亡に際して、隋の兵が宮中に迫ったと聞いた後主、陳叔寶は、景陽殿の井中に愛妃張麗華・孔貴嬪とともに入った。「龍」とは陳の後主を、「鸞」とは愛妃たちを指す。その顚末として悲しむべきは、共に死のうとの約束を果たせぬまま後主は引き出され、愛妃たちは生き恥をさらすはめになったのである。(3) おごれる者も久しからざる運命。亡國の帝王にまつわる井中の哀話にほかならないが、續いて注目したいのは、悲哀に反して慶賀すべき神妙な縁結びの井戸についてである。

明末・馮夢龍の『情史』巻七「情痴類」に收める「樂和」は、文末に「事は小説に見ゆ」と明記されているように、同人の編になる『警世通言』巻二十三所收の「樂小舍拚生覓偶」に依據する一篇である。そのあわい初戀を秘めた一對の男女が反對や危難を乗りこえて念願の婚姻にこぎつける純愛可憐なストーリーに、自らの伴侶となる人を映しだす靈驗あ

る井戸が出現する。

舞臺は南宋の都、臨安。もと衣冠の家柄で、いまは錢塘門外に雜貨店を營む樂翁の息子、名は和。この一人の青年が話の主である。彼は幼年から永淸巷のおじの家にあずけられたが、おじの隣の喜將仕に一歳下の娘があって、名を順娘といった。いっしょに家塾で勉强し、仲間から「喜樂和順とはよくしたもので、まさに天緣だね」とからかわれていた二人は、行くすえ夫婦となる約束をかわしたものの、しばらくして塾もおわり、樂和は父のもとに還って、互いに音信もなかった。

光陰矢のごとく三年がたち、折しも淸明節。おじの家では甥をよんで墓參し、歸りがけに西湖に遊べば、湖船でたまたま喜さん一家と乘りあわせる。十四歲になった順娘の姿態はますます麗しく、樂和は魂も消えんほどに驚くが、會釋したきりで一語も話せず、互いに微笑みかわすばかり。樂和は歸ってから思い斷ちきれず絶句を桃花箋に題する。

嫩蘂嬌香鬱未開
不因蜂蝶自生猜
他年若作扁舟侶
日日西湖一醉回

題しおわると、同心方勝の形に折って、翌日、永淸巷に出かけ順娘に渡そうとするが、チャンスは得られず、かくて足を向けたのが靈驗の聞こえ高い潮王廟。

香燭の類を買って樂和はひそかに禱ったが、紙錢を燒く際、袖の中にしまっておいた例の同心方勝が火に落ち、あわてて取りあげたものの、燒け殘ったのは「侶」の字ばかり。「侶」の字は、口が二つであるから吉兆であろうと思いつつ、樂和は碑亭に足を踏みいれ考えこむ折から、ふと見れば老叟がいる。古びた衣冠をまとい、手には團扇をにぎり、その上には「姻緣」の二字が書いてあるではないか。老叟は年甲をたずね、五指で輪算すると、ややしばらくあっていう、「佳耦は面識のものにして、未知のものにはあらず」。したりと樂和が、「私に思い當たる面識のものがありますが、その緣はいかがでしょう」と問えば、老叟は八角井のところに連れていく。いわれるままに樂和がのぞきこめば、井戸の中には水が汪洋と湧いて鏡のごとき明るさで、不思議にも美女の姿が現れでる。年は十六、七ばかりで、紫羅の衫に杏黃の裙をつけて、綽約としていとおしい。ジッと目を凝らせば、これぞ順娘ではないか。喜びいさむのあまり中に墜ちる、と見て、ハッと覺めれば一場の夢。

不思議ではないか。夢の中での井戸の鏡による占い。廟の碑文から夢中の老叟こそこの廟宇の神、石瑰であったことを知る。この潮王廟は、杭州は武林門外の江漲橋邊に所在し、またの名を「石姥祠」「石姥廟」という。明・田汝成『西湖遊覽志餘』巻二十三「北山分脈城外勝蹟」によれば、祭祀するところは、唐の時代の石瑰なる人物。石瑰は生前、自らの財をなげうち錢塘江の堤を築いて潮水を防ごうとしたが、いまだ功ならずして死した。唐の咸通年間（八六〇〜八七四）に廟が建てられ、潮王に封じられたという。

歸宅後、順娘との婚姻のことを持ち出すが、身分の違いから反對される。そして八月の浙江潮の見物の折、團圍頭に陣取っていた喜さん一家は、例年以上の激しい潮流に順娘が飲みこまれ、それを目撃した樂和はとっさに飛び込む。が、ともに溺れて、弄潮の子弟たちに發見されたのはしっかと抱き合った二人の屍。驅けつけた樂翁から二人のいわれを聞いて、喜公が「生き返れば願いを叶えてやるものを」と聲高に叫べば、時をへて甦る。

喜公は背くことなく日を選んで嫁がせ、晴れて八角井の占い通りの團圓の結末となるが、そもそも井戸の水面は水鏡で、のぞき見る者の像を寫しだすもの。しかるに、この八角井は、他所の人物の姿をも映しだしてしまう。その井戸の奥底には、他者の姿も秘められているのか。自分ならぬ他者の身を映じだす井戸こそ、水鏡の豫言、水占の靈妙さを秘匿しているといえる。しかもそれが夢中の體驗であったというから、夢幻的の感をより深くせざるをえない。この井戸の鏡は、映し出す相手が「姻縁」すなわち婚姻する相手であるだけに、その婚姻の歸結としての男女和合につながる。和合とくれば懷胎、すなわち生殖に關わる井戸との關わりも想起されて[4]、神秘的な井戸の內奥に臨んだ思いがする。

四

水鏡といえば、「吳王井」という井泉清碧なる井戸が存在した。井名にいう吳王とは、臥薪の故事で知られる吳王夫差を指す。夫差は越王勾踐から獻じられた西施をことのほか寵愛し、この井泉に容姿を寫してよそおう西施のかたわらに立って、手ずから髪を梳いてやったという。この吳王ゆかりの井泉こそが話題の「吳王井」にほかならない。明の小說『東周列國志』第八十一回に載るところであるが、その井名に水鏡をつかった西施なる名高い美女の名が附與されていないことこそ異とすべきもの。吳王は籠絡されきった體たらくを後

世に喧傳されることになったということができる。

ところで、井戸の水鏡をのぞき込んでいると、何かその奥底に誘引されそうな感覺にとらわれたりする。かりにその水面に美麗なる人の容姿でも映ったらどうだろうか。その人が見る者を妖惑する。そうした不思議な井戸の存在を傳えているのが、『太平廣記』巻二三一所載の「陳仲躬」（「出『博異志』」）の話である。

唐の天寶年間（七四二〜七五六）のこと、陳仲躬という者は、南京に家居して家産も多く、學問を好むが、詞を修めていまだ成らず、かくて數千金を携え洛陽の清化里で一軒の邸に假住まいをした。その井戸はとても大きく、よく人が溺れる。仲躬もそのことを知ったが、一月ばかりして、隣家の娘が水を汲みにくる。十數歳ほどで、毎日井戸にやってくれば時が經っても立ち去らないのを不思議がっていたが、思わず井戸に墜ちて、溺れ死んでしまった。

陳仲躬は怪しみ思い、暇な折に井戸の上からのぞいてみれば、思わず水面に一人の女の面貌がみえる。年格好は、若く麗しく、流行の粧飾をして、仲躬をじっとみつめるではないか。仲躬が瞳を凝らしてながめれば、紅い袂で顔をおおって微笑み、その妖冶な容態は並々ではない。魂魄恍惚として腑抜けてしまうのも無理はない。かくて仲躬嘆じて曰く、「斯れ乃ち溺人の由來なり」と。かくて顧みることなく退散した。

こうして娘の溺死の謎が解けたわけであるが、娘が目にしたのは容範のよき異性であったかどうか。その不思議な溺死の謎解きは、さらに後日にゆだねられる。數ヵ月後、日照りになり、この井戸は涸れなかったものの、ふと一日、にわかに竭きる不思議がおこった。朝まだき、門を叩くものがある。「敬元頴がお目にかかりたく」というので、仲躬が入るように命じると、まさしく井戸の水鏡でみた者が、緋綠の衣を着ている。その身なりも化粧も今様のもの。「卿(あなた)はどうして人を殺したのか」と訊けば、元頴のいうよう、「私は殺していません。この井戸には、毒龍が住んでいるのです。漢朝に絳侯周勃がここに居を構えて、井戸を掘りました。その毒龍は、洛陽城内の五毒龍で、太一[5]星の左右に侍する龍と氣脈を通じているため、天帝が追徴を命じても、多くは見逃して役務を果たしません。この毒龍は人血を好んで食らい、漢朝よりこのかた殺したものが三千七百人に及びます。水は涸れることはなく、私は唐朝の初めにこの井戸に墜ちて以來、龍に驅使され、妖惑して人を誘いこみ、龍の食用に供している

のです。辛い仕事で、やりたいものではありません。きのう、太一使者に交代されて、天下の龍神が集められました。夜中の子の刻にすでに太一に朝參しましたが、河南の旱天のために問責されて、戻るまで三、四日あります。いま井戸に水がありませんので、あなたがもしいま職人にたのんで井戸を浚ってくだされば、私はこの難儀から逃れることができます。その時は、あなたに一生仕えさせていいただきます。」言い終わると、姿がみえなくなった。

果たして職人に浚わせて獲られたのが、闊さ七寸八分の古い一枚の銅鏡。[6] 洗い淨めて匣に收め、香を焚いてやる。一更ほどして現れた敬元頴の話によれば、もともと師曠の鑄造した十二銅鏡の第七番目で、七月七日の午の刻に鑄られたもの。それを貞觀年間（六二七〜六四九）のこと、許敬宗の婢、蘭苕がこの井戸に落とし、その深さと毒龍の惡氣のために取りだすことができず、毒龍に使役されるところとなっていたというのである。[7]

この鏡の精が敬元頴にほかならず、陳仲躬の「紅綫脂粉の麗しさで、どうやって女子小兒を誘いこむのか」との問いに對しての返答によれば、その變化に常無く、井戸をのぞく人それぞれの悅ぶところに變じ、百方を盡くして毒龍の用に供していたのであった。その名を「夷則之鏡」という。夷則は陰暦七月の異名である。毒龍に苦役を強いられる銅鏡の精。この話では、水鏡に現れる姿は、銅鏡の精の現じた虛幻にすぎず、井戸が本來映しだす眞の神秘的な映像ではなかった。この井戸の變形した幻惑的な不思議こそが本篇の面白味の根底にあるのである。

五

夷則の鏡に人を妖惑させていた龍は「喫人」の凶惡さをもつがゆえに毒龍の惡名をほしいままにしていたにちがいないが、後世の小說『西遊記』や『封神演義』に登場する四海を統べる龍王たちもおよそ惡逆性をそなえているようだ。ただ、もちろんすべての龍が惡逆であるわけではない。また龍は、その毒龍にかぎることなく、水のあるところ、井中にもまた住まうものであった。『西遊記』には、烏雞國王の死體を井戸の水晶宮に安置する龍王もいた。

あるいは『搜神後記』には、嵩高山の大穴に落ちた男が圍碁を打つ老人の教唆を受けて、その西にある蛟龍の住む大井を通って、はるか四川の地にようやく歸り着くという話もある。この話譚は大穴への轉落から始まり、井中の世界を經由

しての歸還譚であり、まさしく異境訪問の話型を滿たしていた。いわゆる「井中の天」[8]の話型に連なる早い時期の話譚であろうと認められるものである。その大井の蛟龍は、危害を加える存在ではなかったが、その話型との關連で注目されるのは、『太平廣記』巻三十四所載の「崔煒」（「出『傳奇』」、また『才鬼記』にも見える）である。

「崔煒」には展開上のポイントが幾箇所かあるので、ともかく井戸に着眼していえば、夜のこと、任翁とその十人あまりの下男に追いかけられた崔煒は、いましも追いつかれるところを道に迷い込み、足をとられて大きな枯れ井戸のなかに落ち込んだのであった。そもそも崔煒は貞元年間（七八五〜八〇五）の人で、監察御史をつとめた崔向の子。父の死後、南海郡（廣東省）に住み暮らしたが、事の發端はこうである。

ある年の中元の日に、開元寺に物見遊山に出かけた崔煒は、酒屋の酒瓮（かめ）を倒して毆られていた乞食の老婆を氣の毒がり、自分の着物を脱いで辨償してやったが、數日して訪ねてきた老婆から難儀を救ってくれたお禮としてもらったのが、越井岡の艾（もぐさ）[9]。疣のある人にこの灸をすえれば治癒するだけでなく、また美艶の人も獲られるとのこと。數日後見物に出かけた海光寺の老僧の耳に疣があるので灸をしてやると、たちまち治り、老僧は山のふもとの金持ちの任翁がやはり疣があると紹介し、果たして任翁は治してくれたお禮に十萬貫の錢を與えて逗留させた。任翁の家では獨脚神なる鬼神を祭祀し、三年ごとに人を殺して供えるのに當たって、人が捜しえず、恩ある崔煒を人身御供にたてることにした。が、司馬相如が琴心をもって卓文君に迫ったごとく、崔煒のひく琴の音に心惹かれていた任翁の娘が、事前に危難を救い、かくて崔煒は逃げに逃げたという次第。

これで終結すれば、怪異にまつわる脱出逃走話にすぎないが、その落井によって話はさらに新たな局面が開かれてゆく。落ちた井戸の中は枯れ葉がクッションとなって怪我もせず、夜明けに見れば、深さは百丈あまりで抜け出すすべもない。が、四方には千人も收容できそうな空間があって、長さ數丈もある白蛇がとぐろを巻いている。「龍王よ！お助けあれ」と叩頭して祈り、蛇の飲み殘しの蜜のようなものを飲むと、飢渇をわすれた。よく見れば、蛇の口のあたりに疣がある。蛇の憐憫（あわれみ）に感謝してお灸をしてやろうとするが、火がない。いかんともできずにいると、はるかに火が飛んできて、艾に火をつけ灸をすえれば、疣は落ちる。蛇は疣のために飲食が自由にならなかったわけで、一寸もある眞珠を吐き出し

て禮物とした。しかし、崔煒は人の世に歸ることを懇願して受け取らない。果たして眞珠を飲み込んだ蛇が這い出せば、跨って洞穴を進むこと數十里。そこは漆黑の闇で、蛇の目の光で四壁の繪畫が時として見え、ついに金獸がくわえた環のついた石門につきあたる。

もう人間界に着いたものと思って門をくぐれば、百餘歩ばかりの廣い部屋がある。先取りしていえば、實はここは南越王趙佗の墓塚にほかならない。地中の現世さながらの宮殿。崔煒は明器とは知らずに墓中の琴をひけば、現れた四人の女たちは胡笳の曲(10)のいわれも知らず、また歸りたいと切に願えば、羊城使者について歸りなさいと教える。やがて太陽の光が照り込んで現れた羊城使者は、一匹の羊に乘った男で、衣冠に身をかためて大きな筆をもつ。廣州刺史徐紳の死亡と後任を知らせる札を受け取った女たちは、崔煒を南海へ送るように賴み、國寶の陽燧の珠(11)を與える。その珠を下賜されるいわれが說かれ、來る中元の日、この御殿の皇帝が崔煒の奧方と定めた田夫人を迎えるべく廣州の蒲澗寺で酒と肴を用意して待てとの約束をし、求められて鮑姑の艾を少しおけば、あっという間に外へでて平地の上に立っている。夜明け近くのことであった。

こうして廣州に歸り着いた崔煒。彼が訪ねたのはいかなる場所であったか。借りていた家を訪ねれば、不思議にも早三年が經過し、當地の刺史の徐紳の死と後任が趙昌であったことを知る。ペルシア人を訪ねて例の珠を賣ろうとすれば、異國の老人が一目見るなり平伏して錢十萬貫で買い、珠が大食國の國寶である陽燧の珠で、漢の初年、南越王趙佗が不思議な人物を使って盜み歸らせたこと、その珠が來年國に歸るはずだと豫言するものがあって、自分が國王の命によって探索していたことを打ち明ける。この內容構成はいわゆる「胡人採寶譚」そのものである(12)。また、次々に探訪の謎が解明されていく。用事で城隍廟に出かければ、羊城使者と似た顏のものがあって、羊城が廣州のことであったことが分かり、送ってもらった時の約束通りに使者の胡粉を塗りなおして廟を增築してやる。それから任翁の家を訪ねれば、古老から南越の尉であった任囂の墓であることが判明し、越王臺や南越王の墓を訪ねていわれも分かる。かつ中元の日に送られてきた田夫人から、先に會った四人の女が南越王に殉死したものたちであること、「鮑姑」が葛洪の妻になった鮑靚の娘で、實は艾をくれた婆さんであったこと、また玉京子が安期生の乘った龍であったことも知られ、崔煒はその後十年あまり南海に

住んだが、やがて財産を使い果たして道術に心を寄せ、妻を伴って鮑姑を訪ねようと羅浮山に入っていったが、その後のことは誰も知らない。

話は入り組んで、平板ではない。運命の戸口を開いたともいうべき老婆との出會い。その救濟報恩から、任翁の家の獨脚神の信仰という神怪的な話の成分を經由して、落井しての白蛇との邂逅がさらなる不思議な體驗の世界を開く。ことに財寶を手に入れた場所は南越王の墓塚の中にほかならず、また任翁の家が任囂の墓でもあったことなど、幽冥の境域の訪問という色彩が濃厚でもある。そして陽燧の珠に關する話題は、いわゆる「胡人採寶譚」の要素を保持していることが明白であり、話の結びは神仙譚的でもある。非常に神秘がかった話がさまざまに轉調して織りなされ、内容的に起伏と變幻の妙のある世界が現出しているといえる。落井は後半の物語へいざなう入り口にほかならず、井戸が墓塚や黄泉へとつながる隘路で、それらの異空間と隣り合わせであることは、『聊齋志異』の「龍飛相公」をはじめ他の話にも窺えることである。ちなみに、この「崔煒」の話は、小山内薫の「いぼとり艾（よもぎ）」（『石の猿』、大正十年六月刊）に再話されたことのあることをあわせて記しておきたい。

六

そもそも龍は水神として水、降雨に關わる存在で、その住みかとして水晶宮も存在した。『太平廣記』巻四二二（「出『傳奇』」）あるいは巻二三二（「出『原化記』」、明鈔本は「出『錄異記』」）所載の「周邯」の一話は、その龍王の財寶を狙う話であった。

唐の貞元年間（七八五〜八〇五）のこと、處士周邯は、外人から水の名手で自在に潛水する年十四、五の者を購いえた。その異能に因んで名を「水精」に變え、蜀の地から長江を下り、水精に潛らせれば時を移して金銀器物を探り出さぬことはなく、溫嶠が犀角を燃やして水中の妖怪を照らし出したという名高い牛渚磯では、怒目戟手の名狀しがたい水怪を相手に、間一髪のところで水精は禍を免れ、寶玉を手に入れた。こうして周邯は富贍となったが、のち數年して、相州を治める友人の王澤を訪ねた折、いっしょに出かけたのが當地の北隅にある八角井。天然の磐石（おおいし）を八角に組んで、闊さは三丈あまりある。朝や日暮れに煙雲がわいて百餘歩にたちこめ、月のでない闇夜には火炎のごとき光が千尺を射て、物を照らすこと晝間のようである。古老の傳えるところでは、その底に

は金龍が潛み、亢陽(ひでり)に禱れば應驗があるという。

この八角井は、先の「樂和」あるいは「樂小舍拚生覓偶」の八角井とともに、南宋・羅燁の『醉翁談錄』(13)に錄された「八角井」との關わりも想起されるが、ともかく「この井戸には至寶があるにちがいないが、それを突きとめる手だてがない」と王澤がいうのを聞いて、周邯はいう、「甚だ易し」と。かくて水精に命じれば、忻然として衣を脱ぎ水中に入っていったものの、しばらくあって水精が出てきていうには、「鱗が金色にかがやくとても大きな黃龍が、數粒の明珠を抱いて眠りこけています。取ろうにも手に武器がなく、龍が氣附くのが心配で、敢えて手を出しませんでした。鋭い劍があれば、よもやの時に斬りつけられるのですが……」と。かくて王澤から寶劍を託された水精は、酒を飲むと劍を手に水中に入る。時を移して四面には觀るものが垣をなす折から、水精が水面から數百歩も躍りでるや、つづいて數百尺もある金色の手があらわれ、鋭い爪が空を切り、水精に摑みかかって井中に入っていった。左右のものたちは懾慄(おじけ)づいて近づいて睹るものはいない。嗚呼哀哉、ついに周邯は水精を悲しみ、王澤は寶劍を失ったことを恨んだが、逡巡するところに、身に褐裟を着て古朴な相貌をした老人が現れ、王澤に拜謁する。「某(それがし)は土地の神です。使君(ちょうかん)にはどうして民草を輕んじなさるか。この金龍は上玄使者で、その瑰璧をつかさどっているのに、どうして一介のものを使い、眠っている隙にかすめ取ろうとなさったのか。龍はひどく怒り、神化をおこして天關地軸を搖らし、山岳にむちくれ丘陵をくだき、百里の大地が江湖となり、萬人が魚鼈となり、君の骨肉とて保てようや。その昔、鍾離意がその寶を愛さず、孟嘗がその珠を返したけれども、子(あなた)がこれにならわないのは、その貪婪の心をほしいままにするからにほかならない云々」。王澤は顏を赤らめ、返すことばもなかった。また老人は、「火急に過ちを悔いて禱らば、ひどく怒らせないですみます」とも促し、たちまちのうちに姿を消す。王澤は犧牲のものを用意して祀った。

この水精や名高い崑崙奴。彼らのもつ能力はまさに超人的で、刮目に價する存在である。水を知りつくした水精の泳力。しかるに、龍の至寶を奪取することを意圖しながら、その潛水の特殊能力も齒が立たず、ここに水中に消えた水精。神の使者たるこの龍は神聖犯すべからざる尊嚴さをそなえているのであり、かつその潛む井戸もまた神聖視されるものであろう。ここに井戸と龍とに對する心意を窺いみることができるが、あるいは龍に限ることなく、井中に神秘的なものの

存在することを豫感させる話は少なくない。井戸に宿れる神靈とでも呼びうべきもの。そうしたものの存在を豫感させてくれる話譚を探ってみると、井戸の奥底にひそむ神秘の深淵の面貌がさらに鮮烈になってくる。

七

『太平廣記』巻二十所載の「陰隱客」（「出『博異志』」）には、二年强を費やして一千尺以上を掘りすすめると、井底から雞犬や鳥雀の聲が聞こえてきたとあったが、[14]『酉陽雜俎』「諾皐記」下「永興坊百姓」（『太平廣記』巻三九九にも同題で所收）にも同様のことが認められる。

唐の開成年間（八三六～八四〇）の末、長安は永興坊に住む民草の王乙が井戸を掘りだし、通常の井戸より一丈あまりも深く掘ったのに、水が出ない。ふと下の方から聞こえてきたのが人の話し聲と鷄の聲。ひどく喧鬧（やかま）しく、ほとんど壁を隔てるかのようであった。井戸掘りは懼れて掘りすすめず、街司は金吾の韋處仁將軍に上申したが、將軍は怪異にわたることなので上奏しなかったという。さらに「周秦故事に據れば」として、驪山に李斯が徒刑者七十二萬人を率いて始皇帝の陵墓を造ったこと、あるいはその地中の井泉について、ひどく深くて、鑿っても入らず燒やしても燃えず、叩いても空（から）空（つぼ）で下天のようで、さても大地の下に別に天地のあることが分かったとの奏上のことも見えるが、原文に誤脱があるようで判然としないことが多い。

ともかく人語と鷄聲、秦の始皇帝の陵墓の造營に關わる所傳である。しかも「別有天地」と別天地の存在が明確に意識されている。そういえば、始皇帝の地下宮殿が發見されるにいたったのも農民の井戸掘りの作業であったと聞くから、時代を越えて地中の異世界との遭遇の機會は確かにあるわけである。

井中から聞こえる人語や音聲に關しては、劉宋・劉敬叔の『異苑』巻一「龍吒」にも、潯陽の曇椿世が長沙に居住したとき、宅に古井があり、毎夜炮竹（ばくちく）のような音が聞こえ、相承によればこれを「龍吒」といったという。龍の叱咤する聲との意味であろうが、そのけたたましい音聲もさることながら、まさに龍の想起されたことは、井戸という水のありかと龍との深い因縁からいわば當然のごとき連想であったように思われる。さらに『太平廣記』巻三九九に所載の「王迪」（「出『祥異集驗』」）にも、唐の貞元十四年（七九八）の春三月、壽州隨軍の王迪の家の井戸が、忽然として沸きたち溢れ、十

日すると水は竭きて、井戸の底から嬰兒のような聲が聞こえ、四月になると兄弟二人が盲となり、また一人が死んだという。井戸の異變は不吉の前兆でもあったようだ。

井底から響きわたる人語や音聲、あるいは井戸水の不思議な現象。それらは、日常性を超えた、畏怖の念を抱かしむる對象と認識されたにちがいない。暗い井戸の奧底にひそんだ見えざる世界、それは不可侵の神聖な世界あるいはあの世とも意識されたであろうし、その一方では怖いもの見たさの覗きの欲求あるいは憧憬をも秘める空間でもあったろう。その敬虔な思考こそ神靈の存在や別天地の創造の大いなる源泉を秘めているのではないか。巧まぬ直截的な畏敬ということができる。井戸の不思議にまつわる話譚の根源的なものをここに認めえるが、その根源性の一方で、その話譚の奧行きと多樣性にはあらためて驚異の眼を向けざるをえない。井戸は話譚にとっても時代を超えて滾々と湧出する無盡の源泉で、千變萬化の話の寶庫であったといえるかもしれない。

八

山東省鄆城縣にある宋江故居には、庭に「宋江井」(15)が殘っているという。平岡正明・黄波『水滸傳・任俠の夢』によれば、「この井戸の壁には穴が一つあり、まっすぐ敷地前方の佛堂の地下室につづいている。宋江は閻婆惜を殺したあと、まさにこの穴の中に身をひそめ、なんとか追手から逃れたのだそうだ」という由緒ある井戸にほかならない。井戸が人を隱蔽することも少なくないが、そもそも『水滸傳』第一回、洞玄國師によって信州龍虎山の伏魔殿に封じ込められていた魔王たちは、洪大尉に遇って禁厭が解かれ、黑氣金光もろともに飛び散った。これぞ妖魔ゆかりの惡漢ならぬ梁山泊の百八好漢、天罡星三十六員・地煞星七十二員であったが、時と所は變わって、日本は江戸の寛政七年（一七九五）のこと、攝州岸和田の侍屋敷の井戸からおびただしい數の靈蟲が飛びいでた。玉蟲こがね蟲のような形をしているが、蟲眼鏡で巨細にみれば、女の形をして手を後ろ手に縛られているような形。名付けて「お菊蟲」。

その由來は、元祿のころ、靑山家が尼ケ岡に在城（五萬石）した時、家祿少なからず給っている喜多玄蕃という者の妻、はなはだ嫉妬深く、玄蕃が心をかけて菊という女を召しつかっているのを憤り、飯椀の中にひそかに針を入れて菊に配膳させた。玄蕃食しかかり大いに怒れば、妻は菊の仕業と讒言する。玄蕃情けなくも菊を縛りて古井戸へさかさまに打ち込

み殺し、その次第を聞いた下女の母も後を追って井戸に身を投げた。その後、玄蕃の家は絶えたとかいうが、寛政七年は菊の百年忌にあたり、その怨念が靈蟲に變じたのだと評判されたのである。

　このお菊蟲は、蝶に化して飛び去ったともいい、その實體は、體の中央を細い絹糸でくくったアゲハチョウの幼蟲であった如くでもあるが、その所傳は、いわゆる下女お菊が「いちまーい、にまーい……」と皿を數える皿屋敷傳説の膾炙に大いにあずかったらしい。屋敷の井戸に亡じたお菊の冤鬼は怨念執拗で、日本の怪談の確かな位置を占めるにいたったが、中國における井中の傳承のばあいはどうであったか。生身の人を井中に誘う幽鬼や鏡なども確かに存在したけれども、彼地の井中の話譚の世界は、むしろ夢幻的で幽遠な深淵であるといってよいかもしれぬ。ひとまずそう概括するにしても、井中の徘徊は極まりしれず、まだまだ汲むべき井戸がありそうである。

〔注〕

(1) 本篇は「八角井異聞—井中の怪—」(「學術研究—國語・國文學編—」第四十一號、一九九三年二月)・「井中奇聞—死生の命と生殖と—」(「中國文學研究」第十九期、一九九三年十二月)に續くものである。

(2) 「井中奇聞」(注1所掲)にも觸れたところである。

(3) その顚末は、『陳書』卷六「後主本紀」・「後主張貴妃傳」、『南史』卷十「陳本紀」下といった史傳にも記されている。

(4) 「井中奇聞」(注1所掲)を參照されたい。

(5) 天神の名。『史記』「封禪書」「天官書」や『楚辭』「九歌」「東皇太一」、『酉陽雜俎』「諾皐記」上などに記載がある。

(6) 宮本常一「井戸と水」(『日本民俗學大系』第六卷所載)によれば、日本の井戸には、井底に皿が眼(まなこ)として入られたり、また井戸の魂として銅鏡を入れる習俗があったらしく、發掘された井戸に少なからずその例が見えるという。

(7) 隋の大業年間に秀才に擧げられ、唐の太宗の貞觀年間に著作郎に除され、國史を纂修した。『舊唐書』卷八十二、『新唐書』卷二百二十三上「姦臣」上にその傳がある。

(8) 「井中の天」に關しては、「八角井異聞」(注1所掲)に觸れたところでもある。

(9) 廣東の越秀山の西にある井の名。越臺井・越岡井・趙佗井・鮑姑井ともいう。『大明一統志』卷七十九「廣州府」「山川」の「鮑姑井」に、「相傳、晉鮑靚女葛洪妻所汲處。」、また同卷「仙釋」の「葛洪」に、「妻鮑氏、南海太守靚之女。行灸於南海。唐崔煒者遊開元寺、有丐嫗、謂煒曰、吾善灸贅疣。今有艾、少許奉子。煒受之、莫知爲誰。後始知爲洪妻云。」との記載が見える。

（10）「胡笳十八拍」を指す。胡笳は北方の異民族の一種の草笛。胡地で後漢の蔡邕の娘、文姫が作ったと傳えられる。

（11）崔豹の『古今注』に、「陽燧、以銅爲之。形如鏡、向日則火生。」とある。「陽燧珠」は、この「陽燧」の名に因んで案出された寶玉であるようだ。

（12）その話譚については、石田幹之助「西域の商胡、重價を以て寶物を求める話」「再び胡人採寶譚に就いて」「胡人買寶譚補遺」（『長安の春』所收）、澤田瑞穗「異人買寶譚私鈔」（『金牛の鎖』所收）に廣く紹介される。本篇も「西域の商胡、重價を以て寶物を求める話」の十三に「崔煒、洞窟に入りて「陽燧珠」を得、大金を以て之を胡人に賣る話」の題で採錄されている。

（13）「八角井異聞」（注1所掲）を參照されたい。

（14）「八角井異聞」（注1所掲）に觸れたことがある。

（15）一九九六年四月、日本放送出版協會刊。本書は、一九九四年九月十八日にＮＨＫ衛生第二放送で放映された『世界・わが心の旅―水滸傳・義俠の世界』をもとに書き下ろされものである。